

組織目標評価報告書（平成27年度）

部局名：

大学院医歯薬学総合研究科 薬学系

部局長名：

檜垣 和孝

目 標	目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組 (部局での検証とそれに対する取組)
<p>①教育領域</p> <p>①-1 目標</p> <p>○教育の実施体制(組織的なFD、教員のインセンティブ向上を含む)について 博士課程及び博士後期課程の新カリキュラムを実施・検証するとともに、英語化(シラバスなど)の構築を進める。 ○教育方法・内容について 博士課程及び博士後期課程での新カリキュラムを実施し、検証する。英語化(講義体系)の構築を進める ○教育の成果(学習の成果、卒業後の進路)について 引き続き「厳格な学位授与体制」を構築・強化する。論文発表会について検証を行う。 ○学生支援について 学生生活委員会が総合的なケアを行い、学生の生活・学習・研究面での支援を行う。 ○その他</p> <p>①-2 目標とする(重要視する)客観的指標</p> <p>○FDの体制、内容・方法や実施状況 ○教育課程の内容・構成 ○学生が受けた様々な学会賞の状況</p>	<p>自己評価</p> <p>○教育の実施体制(組織的なFD、教員のインセンティブ向上を含む)について 博士課程及び博士後期課程の新カリキュラムを実施し・検証したところ、問題なく導入されていることを確認した。また、シラバスの英語化については、担当教員に依頼をし、英語による講義の準備を進めつつある。 ○教育の成果(学習の成果、卒業後の進路)について これまでと同様に学位審査体制の見直しを進め、「厳格な学位授与体制」を構築・強化した。さらに、本年度の審査体制の問題点を指摘し、予備審査と主論文採択日時について新たな規則を設けることとした。学生の卒業後の進路についても引き続き調査し、希望した職種への就職が叶っているかなどを明らかにし、問題点を探る。 ○学生支援について 相談委員会を設け、学生の研究面や生活・学習面でのカウンセリングを行った。 ○ファカルティ・ディベロップメントの体制について 教育実施体制の変更ならびに学位審査体制などについて教員にアンケートを取ることで状況を把握し、FDを行うことで共通認識を持つようになってきた。これらの取り組みは良い方向に進んでおり、引き続き実施していく。 ○学生が受けた様々な賞の状況について 毎年多くの学生が学会/研究会で受賞している。とくに全国レベルの薬学系学会では、日本薬学会において学生優秀発表賞2名、日本分子生物学会/生化学会において若手優秀発表賞1名、日本薬理学会において年会優秀発表賞1名が受賞しており、高く評価されている。</p>
<p>②研究領域</p> <p>②-1 目標</p> <p>○研究水準及び研究成果等について ・新たな、部局内横断型の大型研究費獲得に向けた検討を開始する。 ・分子イメージング高度人材育成事業による創薬教育/研究を推進し、理研との連携による薬学系独自の創薬大学院教育・研究を充実し、人材育成を推進する。 ・創薬等プラットフォーム事業を基盤として、創薬研究の進展を図る。</p> <p>○研究実施体制等の整備について ・大型研究資金獲得のための方策を他大学・研究機関や他学系と連携し、共同研究を推進する。 ・科研費等の大型外部資金獲得を継続推進する。</p> <p>○その他 ・価値の高い研究業績を挙げ、成果を社会還元するため公開講座や研究科ホームページ等に掲載、広報する。 ・研究遂行におけるコンプライアンス遵守徹底をはかる。</p> <p>②-2 目標とする(重要視する)客観的指標</p> <p>○論文・著書等の研究業績の状況 ○競争的的外部資金受入状況 ○学部・研究科等を代表する優れた研究業績リスト(SSリスト) ○若手教員、女性教員、外国人教員の採用状況</p>	<p>自己評価</p> <p>○研究水準及び研究成果等について ・新たな、部局内横断型の大型研究費獲得に向けた検討として、これまでのインパクト研究に、難治性感染症疾患を統合した形での研究提案に向けた検討を開始した。 ・分子イメージング高度人材育成事業による創薬教育/研究を推進し、理研との連携による薬学系独自の創薬大学院教育・研究を継続実施した。 ・創薬等プラットフォーム事業を基盤として、合成支援を中心とした創薬研究の進展を図った。</p> <p>○研究実施体制等の整備について ・大型研究資金獲得のための方策として、複数分野で他大学・研究機関や他学系と連携し、共同研究を継続推進した。 ・科研費等の大型外部資金獲得に向けた申請書作成指導を継続実施した。</p> <p>○その他 ・価値の高い研究業績を挙げ、成果を社会還元するため公開講座を継続実施するとともに、高インパクトファクターの雑誌に掲載された研究業績を、薬学部(及び全学)ホームページ等で広報した。 ・研究遂行におけるコンプライアンス遵守徹底を継続実施した。</p>
<p>③社会貢献(診療を含む)領域</p> <p>③-1 目標</p> <p>○地域社会との連携、社会貢献:薬剤師および一般社会人を対象に薬学公開講座を開催し、薬学に関する最新情報の提供と知識の向上に努める。 ○国際交流・協力、外国人研究者の雇用について:韓国・成均館大学との連携を更に深めると共に、アジアの有力大学の薬学部との新たな連携を進めることにより、国際交流を深めるよう努める。また、難治性感染症プロジェクトを通じて培ってきた関係を発展させ、中国の研究機関を中心に、研究協力を進める。 ○その他:薬用植物園の一般公開を実施し、薬学関連の科学に対する社会的な理解を進める機会とする。</p> <p>③-2 目標とする(重要視する)客観的指標</p> <p>○公開講座等の実施状況 ○地域貢献・国際貢献への協力の状況</p>	<p>自己評価</p> <p>○地域社会との連携、社会貢献:薬剤師および一般社会人を対象とした公開講座を実施し、薬剤師の卒後教育、また一般社会人に対する薬学への認識度を高めることに努めた。 ○国際交流・協力、外国人研究者の雇用について:韓国・成均館大学および中国・内蒙古大学との教育研究連携をさらに進めるとともに、ベトナム・ハイフォン医科薬科大学との交流をも進めた。また、ミャンマーの研究者についても研究生としての滞在支援を行った。 ○その他:一般社会人向けに薬用植物園を公開し、薬学に関する理解を深めてもらうよう努めた。</p>
<p>【総括記述欄】</p> <p>教育、研究、社会貢献領域、いずれも当初目標を良好に達成したものと評価している。来年度は、教育領域では、より質の高い大学院教育を目指すべく講義内容の検証等を試みる。研究面では、科学研究費補助金申請の指導等を通じ、臨床薬学分野、基礎薬学系の研究強化を促す。社会貢献領域においては、引き続き公開講座を実施し、薬学に関する最新情報を一般社会人、薬剤師に提供するとともに、アジアの有力大学を中心に、国際交流を深めるようつとめていく。韓国成均館大学とは、ダブルディグリー制度への入学へ向けて、引き続き、交流を深めていく。</p>	